
僕の中のもうひとつの物語

刻糖風雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の中のもうひとつの物語

【Nコード】

N6982Y

【作者名】

刻糖風雅

【あらすじ】

読書好きの本宮麻琴は、近所の図書館で借りた本から不可思議な世界へと巻き込まれていく。

四年前に行方不明になった麻琴の父、弥生。

何かを隠す麻琴の母、雪乃。

麻琴を助ける謎の男、サラン。

麻琴がよく行く図書館の司書、藤宮孔紀。

麻琴のクラスの担任、鈴城凜。

魔法と本とヒトの世界が交錯する。文科系ファンタジー。

第一章 夢と手招き

第一章 夢と手招き

僕には、もう一つの世界がある。

僕のもう一つの世界。それは、本の中にある。本を読むたび、僕はその世界の中に入り込んでいく。

今は夕飯前の読書タイム。

二日に一冊のペースで読んでいるけど、まだまだ足りない。

僕は、この先もたくさんの本を読む。

「麻琴！ ご飯出来たわよー」

本宮 麻琴。これが僕の名前。

「わかったー。今いくー」

読んでいた本を、ずらりと並ぶ本棚の一番扉に近い棚にしまった。部屋の扉を開けてバタバタと階段を駆け降りて行く。

ガチャ。

リビングの扉を開け中に入ると、ハンバーグの香りがした。

「へえー。今日は、母さん特製のハンバーグか」

椅子を引いてテーブルの前に座る。

「そうよお。一生懸命作ったの。だから、野菜も食べなさいね」

「うう……」

僕は、野菜が嫌いだ。

母さんは、ハンバーグや唐揚げを作るたび、「頑張って作ったのー」とか、「一生懸命作ったのー」とか言って僕に野菜を食べさせる。

母さんに言われて毎回しぶしぶ食べている僕。結構子供っぽいよなあー。

「さあー、食べるよー」

「ん。いただきます」

箸を手を取って、ハンバーグを一口。
母さんの視線を感じて、野菜も口に運ぶ。
うう……。やっぱり好きじゃない。

野菜と格闘しながらも夕飯を食べ終えた。お皿を洗って二階に上がる。

自分の部屋の扉を開けて中に入ると、
「あれ？ 僕………しまつて降りたよな？」

机の上には、しまつてから降りたはずの本が開いて置かれていた。部屋には誰かが入ってきたという様子は特になかった。机に近寄って開かれているページを見ると、主人公が異空間に飛ばされる場面。

この場面まで、僕はまだ読んでいない。早く続きを読もう。

机の前に座り、栞を挟んでいたページを開くと、「私の世界に招待する」と書かれた名刺サイズのメモが挟まっていた。

「何だ………これ？」

誰かの悪戯だろうか。

カチコチと一秒一秒を刻む秒針。なんだか不吉に感じた。

まだ、八時半だったけど、寝ることにした。

* * * * *

朝、早く寝た割には起きるのが遅かった。今は………五時半。まだ、母さんは寝ている時間だ。

昨日読んでいた本の続きを読もうかとも思った。けど、昨日のこともあつてなんとなく頭がボーツとしていた。

「………寝よう」

もう一度布団に潜り込んだ。

そして、僕はまた眠りについた。

眠りの中。

誰かが僕に問いかけた。

お前は、誰だ？

なんだろう……。なんだか懐かしい聞き覚えのある声だ。

「僕は、本宮麻琴」

そうか……。本宮か。麻琴。“夢の扉”に気をつける

「えっ？ 何のこと！？ ねえ。あなたの名前は？」

俺は……。サラン。他は、教えられない

サラン……。？ 外国人か？ いや、でも、日本語でさらさらしゃべっていたし……。

それより、サランって名前どこかで聞いた気がする。

「“夢の扉”って何？ 気を付けるって……。わからないよ」

頭の中に自分の声だけが響いている。

サランの声は、もう返ってこなかった。

* * * * *

目が覚めると、六時だった。

そろそろ起きないと遅刻だ。

いつもは、七時四五分くらいに家を出ている。でも、今日は図書室に本を返してから教室に行く。だから、七時半に家を出る予定だ。制服に着替えて、朝ご飯を食べに下に降りる。

母さんはもう流石に起きていて、朝ご飯を机に並べているところだった。

「あつ、起きたのね。今朝は、トーストとベーコンエッグよ」

「母さんの作る朝ご飯なんて、ほとんど変わらないじゃないか。：

…フアァー……」

欠伸をしながら伸びをした。

母さんのいるリビングを通り過ぎて、洗面所に顔を洗いにいく。

バシャバシャと顔を洗った。

普段は眼鏡だが、今日は学校で体育がある。だから、コンタクトだ。

慣れた手つきでコンタクトを入れていく。

中学一年のころから使っているから、もう四年目になる。流石にもう慣れた。

リビングに戻るともう朝ご飯の準備が終わっていた。

「麻琴。早くご飯食べるよー」

「ああ、うん」

僕が席に着くと母さんが、

「いただきます」

と言つて、トーストを食べ始めた。

「いただきます」

僕も食べ始める。

目玉焼きを口に運んでいると、母さんが暗い顔で僕を見た。

「今日は、眼鏡じゃないのね……」

「うん」

なんだか暗い雰囲気になってきた。母さん、急にどうしたんだろ。いつも明るいのに……。

「やっぱり似ているわね……父さんに」

父さん……僕の家では、あまりにも出てこなさすぎる単語だ。

父さんは僕が中学生になった春に、行方不明になった。警察にも届け出たが、結局見つからないまま捜査は打ち切りになってしまった。

実際、母さんは父さんが行方不明になってから、一週間も警察に届け出るのを渋っていた。

その時の母さんを見て僕は、「母さんが父さんを殺したのでは!？」と思った。母さんに問いかけると、

「麻琴……本の読みすぎじゃないの!? 八八八ハアーツ」

的なことを言われた覚えがある。

今思えば父さんと母さんは、父さんが行方不明になる前の日くらの夜に話をしていた。あれは、何だったのだろうか。今度機会があったら母さんに聞いてみようか。

「ご飯を食べ終えて、歯を磨いて、鞆を取りに行つて……、なんてしていたらもう、七時二五分だった。

僕の家はマンションで、高校も近いところにある。図書館もそれなりに近いところにあつて、すぐ行くことが出来る。とっても便利だ。

「母さん、行つてくる」

「んー。行つてらっしゃい」

玄関を出てみると、朝日が眩しくて咄嗟に目を瞑つた。

エレベーターに乗り込むときに人の気配を感じたが、周りには誰も見当たらなかつた。

自転車をこいで図書館に向かう。

すっかり見慣れた図書館。

自転車置き場に自転車を止める。

図書館で知り合つた司書の藤宮ふじみや孔紀こうきさん。本の趣味が凄く合う。

確か……二五歳くらいだったかな。

昨日の本も藤宮さんに勧められて借りた。まだ全部読み終わつてないけど……。

図書館はまだ開いてない。けど、藤宮さんはいつも七時半前から図書館に居る。僕は、藤宮さんに裏口から入るのを許可されている。ぐるっと建物の横へ回る。ドアノブを回すと鍵は開いていた。

裏口は直接図書館のカウンターに繋がっている。

「おつ、麻琴君」

「おはようございます、藤宮さん」

「おはよう。この前言った本の続き、見つけておいたよ」

そう言つて、この前僕が藤宮さんに頼んでおいた本を差し出した。
「そうです、これですよ！　ありがとうございます」

「いやいや、常連さんだからね。それはそうと、もう四十五分過ぎ
たけど行かなくていいのかい？」

ポケットから携帯を取り出して、開いて画面の右上を見ると、四
十七分と映っていた。

「あ、じゃあそろそろ行きますね。帰りに寄れたらまた寄ります」

「うん、行ってらっしゃい」

「はい、行ってきます」

カウンターの後ろの扉がパタンと閉まる。

孔紀は、カウンターの椅子に座つて、入口から四つ目の本棚に向
かつて声をかける。

「サラン。いつまで隠れてるつもりだい？」

「これくらいお見通しか、孔紀」

「かつて総司令官をやつてたんだ。この程度の気配なら気付くさ」

「そうか、俺もまだまだだな……」

軽く微笑んでから孔紀の方を向き、真顔に戻す。

「今日来たのは、“夢の扉”についての事でなんだが……」

孔紀の優しげな表情が、凍りつく。

「まさか……また、開くのか……？」

「ああ。だが、もしかしたら食い止められるかもしれない」

「本当か！？　どうすれば食い止められるんだ？」

ガタツとカウンターに手を突いてサランに迫る。

「ポイントは、麻琴だ」

「麻琴君？　彼が関係あるのか？」

孔紀は、眉を寄せてサランの目を見据える。

サランは、呆れた様に孔紀の顔を見て、小さなため息を吐く。

「麻琴の名字は何だか知っているか？」

「知ってるさ、本宮だ。いや、待て、本宮って……まさか、麻琴は

弥生の息子か……？」

「気付くのが遅すぎるぞ。元総司令官」

棘を含んだ言葉をサランが放つ。

「嫌味つたらしいな、サラン。まあいい。凜にはもう伝えたのか？」

「いや、まだだ。麻琴の見張りついでに伝えてくるよ」

「そういえば、麻琴君の高校の教師だったな。確か、担任だ」

「むしろ都合だ。じゃあ、そろそろ行かないとな。それからシユ

ラから伝言だけど、俺と孔紀と凜とローズとライトのみ非常時に魔

術の使用を許可してくれるとさ」

「非常時がないことを祈ってるよ」

サランは、カウンターの後ろの扉から静かに出て行った。

第一章「夢と手招き」(後書き)

二回目の投稿です。

今回は、ファンタジーに挑戦しました。あまり得意なほうではないので、得意ジャンルを増やすために投稿しました。

長編になると思いますので、途中で止まっても怒らないでください。

でわ、このへんで。

第二章　入口からの声

「起立、気を付け、礼」

『おはようございます』

日直の声とともに始まるHR。今日の日直は、委員長だ。委員長

阿波井総一あわいそういちは、爽やかな顔つきに誰にでも優しい性格。スポー

ツ万能、成績も学年トップ。その上先生受けがとても良いという名前の通り総てが揃っている。校内で知らない人は居ないと言う位有名だ。

僕のクラスの担任、鈴城凜先生は、社会科担当している。真っ黒な髪の毛に、濡れ羽色の瞳、皺一つ無い黒のスーツ。その反面、肌は透けるように白い。若干ずれた眼鏡は、赤い縁だ。

「連絡は二つ。今日は、帰りのHRで新しい委員会を決めるから考えといて。それから……本宮は後で私のところまで来るように。じや、以上」

呼び出しか……何のことだろうか？ 思い当たることは特に無いけど。後でつてことはHR終わってすぐかな。

窓側の僕の席からは、校庭が一面見渡せる。秋に入ったばかりとは言え、落ち葉がヒラヒラと落ち始めていた。

委員長がまた号令を掛けてHRを終わった。

HR終了後、社会科準備室にて

鈴城先生に此处　社会科準備室　で待つように言われたのだが、なかなか来ない。そろそろ次の授業が始まってしまう時間なのだが……。

「ごめん、遅れた」

ドアが開いて入って来たのは、鈴城先生と……誰だろうか？

鈴城先生の後ろから入って来たのは、紺色っぽい髪の毛に灰色の

瞳をした長身の男の人だった。凄く綺麗な整った顔をしている。服装は……コスプレなんだろうか……？ 黒いロングのコート（パーカー？）グレーのTシャツに黒い革のズボン。首には十字架のペンダント。左手首にもブレスレットが幾つかチャラチャラと音をたてている。

「鈴城先生……あの、次の授業に遅れそうなんですけど……」

「そのことなら心配ない。本宮は私の私用で一時間目は欠席ということになっている」

「え……？ 私用って……学校関連じゃないんですか？」

「ええ、違うわ」

サラッと認めただけど、学校に私用で通るのか……。凄いな。

僕としては、苦手な一時間目の科学を受けなくて済んだから、ラッキーだと思っておこう。

「じゃあ、僕は、何についての話で呼ばれたんですか？」

「そうね、とりあえず座って話しましょう」

社会科学準備室には、四人で座るのが限界な小さめの机がある。

僕の向かいに鈴城先生。鈴城先生の隣にあの男の人が座る。

それより……この人誰なんだろうか？

「鈴城先生、あの……隣の男性は……？」

「ああ、紹介が遅れたわね。これから話す話に関係あるの」

あの男の人が僕の目をまっすぐ見てくる。そして、口を開いた。

「覚えてるか？ サランだ。正式には、サラン・ジエ・ロードという。サランと呼んでくれ」

聞き覚えのある低い声は、今朝の夢に出てきた声だ。サランと名乗ったのだから本人で間違いないのだろう。

「サランって夢に出てきた……」

「それは、声だけが確かに俺だ。詳しいことは、今から凜が説明する。いいか？ 今から話すことは、決して嘘でも冗談でもない。事実だ」

「は……はい」

サランの気迫に押されたのか咄嗟に「はい」と言ってしまった。

「そうね。まず、私たち　サランと私は……異世界から来た魔術師よ」

「魔術……師……？」

「そう、魔術師よ」

すごく驚いた……と言うか、急に魔術師だ、異世界から来たなどと言われたら普通は驚くはず。

それより、本当なんだろうか……。

「まだ信じてもらえてなさそうね。サラン、見せてあげて。抑えてね」

サランは黙ったまま席を立ち、十字架モチーフのペンダントに手をかけた。そして……。

「うわっ！」

思わず目をふさいだ。ぱあっと溢れるきらきらとした光に耐えられなくて。

次にサランを見たとき、サランの手にあっただのは　。

「剣だ……」

そう、見ればすぐわかる。剣だ。

見間違っはすがない。鋭く光る剣先。サランの身長より少し短いくらいの長剣だ。^{ロングソード}サランが持っている部分には、十字架の面影が残っている。

「信じてくれたか？」

目の前でこんなコト見せられたら、信じないわけにもいかない。

それに……なんだろう、この本を読むときに似た感覚。

「簡単に説明するけれど、私たちの元居た世界　魔法界は今、あなたのお父さんが封印したはずの男によって滅ぼされようとしているの」

「えっ！　父さん！？」

「そうよ。弥生でしょ？　私たちと共に旅をした仲間よ」

ということとは、父さんも……魔法を使ってたのか？

「正確に言うのなら、俺たちの隊の隊長だったんだ」
付け加えるようにサランが言った。

「で、本宮には、その男に気を付けておいてほしいの。きっと弥生の息子であるあなたは狙われるから」

「はい、まだよく分らないところもあるんですけど……とりあえずその男に気を付けとけばいいんですよね？」

「そうだ。それから“夢の扉”にも気を付けた方がいいだろう」

そういえば、“夢の扉”って今朝の夢の中でも言ってたな。

「あの……。その、“夢の扉”って何のことですか？」

次は、鈴城先生が説明してくれた。

「“夢の扉”っていうのは、今日サランがあなたにやったような魔法の事なの。夢の中に魔法界への扉を作る。そして、寝てる間に魔法界に引き込まれる」

「気を付けるってどうすればいいんですか？」

「気を確かに持つこと。自分の選んだ道に迷いが無ければ、引き込まれることはない」

父さん、今どこに居るんだろう……。その魔法界というところに居るんだろうか。生きているのかも分からない。心配なのに……。心配で仕方ないのに僕にはどうすることも出来ない。

「わかりました。それから、父さん、その……魔法界の方に居るんでしょうか……？ 四年前から行方不明の状態なんですけど……」

俯きながら僕は言う。僕の言葉から少しの間を置いて、サランが答えてくれた。

「すまないが、俺は知らないな」

「私もよ。力になれなくてごめんなさい」

鈴城先生も少し俯きつつ言った。

「いえ、知らないならいいんです……」

サラン達なら知ってるかと思っただけだが、知らないらしい。もし、これで安否がわかればと思っただけ……。

「じゃあ、そろそろチャームもなるので行きますね」

サランの横を通り過ぎて、ドアをガラガラと開け廊下に出た。
廊下は肌寒く、シーンと静まっていた。僕は独り自分の教室に向
かって歩き出した。

この後、いつも道理授業を受けた。

第二章↳入口からの声↳（後書き）

『僕の中のもうひとつの物語』 前回、第一章に引き続き、第二章です。

第一章を読んでくださった方ありがとうございます。

まだまだ続くと思われまので、飽きずに見ていただけたらと思います。……飽きられないような作品にしていきたいと思えます。努力します。

でわ、この辺で。

第三章　会いたいと思いの写真

あれから、いつも道理に授業を受けた。

現在、RHR。ロングホームルーム新しい委員会を決めている。

言うまでも無く、学級委員は阿波井総一だ。女子はくじ引きになり、最終的には女子の中でリーダー的存在の川神麻理奈かわかみまりなになった。僕は結構向いてると思う。

ほかの委員会もサクサクと決まった。

保健委員や、報道委員、図書委員等……。もちろん僕は、図書委員になった。入学してからずっと図書委員をやっているし。

「よし、これで全部決まった。新委員会に入った人達は忘れずに委員会に出ること。よろしく。連絡は無いから……。じゃあ、阿波井、号令」

「起立、気を付け、礼」

『さようなら』

何と無く、鈴城先生と目があつた気がしたけれど、気のせいだろうか。

学校からの帰り自転車に乗らず、パンクした訳でもない自転車を手で押して歩いている。

図書館に寄る気にもならず、家に直帰した。

家に帰ると、母さんも仕事で居ない為、独り自分の部屋で本を読むことにした。

昨日のあの本を開くと、あの紙が挟まったままだった。自分の勉強机の引き出しにしまっておく。

引き出しには、母さんと僕とそれから、僕に似た顔の男の人……。父さんが写った写真が一枚入っていた。懐かしい。家族で撮った写真なんてほとんど無いけれど、これは、僕の中学の入学式に撮った

写真だ。背景には桜と中学の校舎。父さんは僕の肩に手を回し、母さんはその光景を見ながら微笑んでいる。

父さん……。写真を見たら無性に会いたくなった。会いたくても会えないのだけれど……。

ベッドに寝っころがって本を読み進める。昨日の紙が挟んであったところは、もう通り過ぎた。

気が付けば、もう六時を回っていた。

ふああー……。なんだか眠くなってきた。

ちよつとだけ寝ようかな。母さんが帰ってくるのは七時くらいで、僕の家はいつも八時近くからご飯を食べ始める。三十分くらいで起きれば問題ないだろう。

眠りの中へ堕ちて行くのは早い。

* * *

「……麻琴君。こんにちは。そして、初めまして」

誰……？

また夢？

サラン？ 違うサランの声じゃない。

目の前が急に明るくなって、一人の男の人が見えた。

金髪に、茶色い目をして、全身を青と白に纏めたその男は、サランと同様にコスプレかと思紛う服装をしていた。右側の目は、サラナな金髪で隠れ、周りを見るのは無理そうだった。指にはリングが一つ嵌り、首からは金色の指輪をチェーンに通しただけのネックレスが架かっている。

「あなたは……？」

「僕ですか？ シランといます。紫に蘭で紫蘭。良い名でしょう？」

「？」

「……」

「さて……」

ん？ なんだろう……雰囲気が変わった気がする……。

「麻琴君。一緒に来てもらいますよ」

わっ！ 背中にゾクツとした何かが来た。

僕に向けられる紫蘭という男の目。笑ってるように見えて、目の奥が笑ってない！

直感で分かる。

ヤバイ。

気付くのが遅かった。寝ぼけてたのかもしれない。これは、サランの言っていた“夢の扉”じゃないか！

どうしたらいいんだろう。あっ、夢を覚ませばいいのか。

頬をギュツと抓ってみただけ、ただ痛いだけで、目の前にはあの男が居たままの何も変わらない景色だった。

何も出来ないまま少し離れたところに佇む男を睨み返していた。

「ああ、そんなに警戒しないでください。無理やり連れて行ったりは、しませんから」

「じゃあ、付いて行きませんかよ。早く僕の夢から消えてください」

「酷いですね。少しくらい考えてくれても良いじゃないですか」

「嫌です。会ったばかりのあなたの話を聞く義理は無いですから」

「そうですね。もっともです。でも麻琴君、あなたは僕と一緒に来るはずですよ。僕は、あなたのお父さん、弥生さんを探すチャンスをおげてるんですよ？ 僕の誘いを断ったら、弥生さんは一生帰ってこないでしょうね。どうします？」

微笑みを浮かべながら紫蘭は僕の方を見ている。

父さんに会いたいと思う気持ちは確かで、それでも扉を潜るわけにはいかないんだ。サランとのこともある。

「あなたは どうして僕を連れて行くこうしてるんですか？ 父さん

……弥生の息子だからですか？」

「麻琴君。君は弥生さんの血を引いている。資格を持っているはずなんだ」

「その、資格ってなんですか？」

「ここから先は教えるわけにはいかないよ。付いて来てくれたら、その時に教えるよ」

「はぁー……。もうどうして良いか分からない。」

「わかりました。考えさせてください」

「だから、そのまま考えることにした。運よく一回現実に戻してくれるかもしれない。そしたら、鈴城先生に相談しよう。」

「考えてくれる気になったんだね。時間はどれ位欲しい？」

「えっと……。二日間の間に答えを出します」

「わかった。じゃあ、二日後の夜寝た頃にまたお邪魔するよ」

「はい、そうしてください」

「上手くいった。これでいい。二日間ゆっくり考えよう。」

「うん、いい返事を待ってるよ」

「サツ、と紫蘭は僕の視界から消え、僕は元の自分の部屋に戻った。」

「それと同時に母さんの「ただいまー」という声があった。」

「時計は六時四十五分を指していた。」

第三章↳会いたいと思い出の写真↳(後書き)

この調子だと、まだまだ続きます。

今回も読んでくださいました皆さんありがとうございます。

学校のテストも終わりましたので、どんどん書いていきます(ア
イデアが出る限り……)。

でわ、これからもよろしくお願いします。

第四話〜二日間と涙の……〜（前書き）

今回遅れてしまいすいません。

色々に詰まってきました……。

何とかアイデアを絞り出して作りました！

年も明けまして。。

今年もよろしくお願いいたします。

第四話〜二日間と涙の……〜

母さんといつも道理夕飯を食べ、また自室に戻った。

夕飯を食べてる間は父さんの事が頭から離れず、母さんを見るたびに引き出しにしまっている写真を思い出した。

あの楽しかった日々……今がつまらない訳じゃ無いけれど、母さんが心から笑っていたのは父さんと僕と三人で過ごした日々だったと思う。

父さんには帰ってきてほしいけれど、紫蘭の言った言葉に信憑性は無い。紫蘭の言ってることが本当だとして、父さんを連れ戻すことが出来るのだろうか……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6982y/>

僕の中のもうひとつの物語

2012年1月1日02時48分発行